

NPO やすらぎの郷 いいの

安心して住み続けられるまちをつくりたい！



大きく実れ子供たち — “いいの”の秋

大久保小学校では、5・6年生が、総合的な学習の一環として、米作りの体験を行っています。地域のNPO法人「結 倶楽部」さんの協力のもと、これまで田植え、田の草取り、稲刈りを行いました。

田植えでは、田んぼの土の感触を味わいながら、苗を1本1本ていねいに植えました。田の草取りでは、水生の生き物や水源地の観察も行いました。今回、たわわに実った稲を鎌で刈り取りました。

このような貴重な体験を通し、子どもたちは、米ができるまでの苦労を知り、収穫の喜び、働くことの楽しさを感じ取ることができました。また、今後、作物に対し、感謝の心をもって食べることにもつながっていきます。

大久保小学校長 佐藤 浩昭

みんなの広場

アンパンマン！！

今日は家内の愛子さまのお誕生日。四人の孫からお祝いのメッセージが届きました。二才の曾孫からはアンパンマンのお面をかぶって、片言で「オメデトウ」には婆さん、涙ウルウルで(ありがたい)。

アンパンマンといえば、NPO(やすらぎの郷いいの)の方々です。私がいつか車のもらい事故で困っていた時、どこからともなく現れて、あちこち連絡をとって助けてくれました。軽い脳梗塞を患った時も目敏く気付いて教えてくれました。子供達でなくとも大好きになるのは当然です。

私も後期高齢者になりましたが、お世話になるだけでなく、私も出来ることがあれば元気なうちに恩返しをと、思っただけはおるのですが・・・

〈賛助会員 佐藤 祐吉〉



今、私ができる事



「待っていたよ」とあたたかく笑顔で迎えてくれる利用者様に元気を頂き、コミュニケーションをとり、耳を傾け共感し関わらせていただいています。また、家族は24時間介護している中で眠れているか、頑張り過ぎていないか会話の中で見出し、少しでも力になればよいかと思っています。より良いサービス提供をする為、上司に迅速に報告、連絡、相談をする事、仕事の統一化を図り共用していく事、職場での向上会議をしていく事。仲間とのコミュニケーションを図っていく事だと思っています。

先日新聞記事に介護職に就いても辞めてしまうという記事が載っていました。近年高齢化社会になっている上で、安心して生活していく為にはどうすれば良いのだろうかと考えさせられる内容でした。今自分が出来る事はなんだろうと思った時、それは心身ともに健康であり、より良いサービスを利用者様にしていく事だと思いました。

〈ヘルパー 齋藤 ミヨ〉

開設6年目によせて

会員 古関 善一郎

「安心して住み続けられるまちをつくりたい」の想いの強まりのなかで、現状で何をするのが安心して住み続けられる町となるのかを思っていた時に福島市との合併が在って、それまでお世話になって居た「訪問介護」のヘルパーの方々が、福島市内の社会福祉協議会へ統合されたので、仕方なく農協さんのヘルパーさんにお世話になって、私の家内はあの世へ旅立ちました。3年間の在宅介護を行なう中で、訪問介護のヘルパーさん、訪問医療のお医者さん、看護師さんに大変お世話になって私の在宅介護が出来ました。

飯野町時代の「訪問介護」のありがたみが私にとって心に響いたので、「安心して住み続けられるまち」の条件は、身近に同じ想いを持ち活動する人たちが居ることが、先ず第一の条件だと思っておりました。「NPO やすらぎの郷いいの」設立を計画しているとのお話を聞きつけて、会員として参加したくなる事は自然の流れでありました。そして、開設6年目とな



ることに感激を覚えます。この間には、偉大なる前事務局長の訃報、その後の職員の皆さん、齋藤憲芳様のお力に感謝で一杯です。

これからも、会員としての役割は果たしますのでよろしくお願ひ致します。



古関 善一郎さんの寄稿によせて

奥様の介護を御経験なさって、当会の会員となった経緯を伺い共感いたしました。誰でも身近に介護を必要とする者がでてくるとは、想像していませんでしょう。

でも、病気、老い、精神疾患、などの要因は、現代社会に身近に存在いたします。

共助の精神で当会の「安心して住み続けられるまちをつくりたい」と言う設立趣旨に賛同し会員となり活動いただいております。

当会では、同様の賛同者を広く求めています。

〈会員 新村 章〉

<安心して住み続けられるまち リレートーク その4 >



「飯野ふるさと村」開所から2年～

特別養護老人ホーム飯野ふるさと村は開所より2年半が経過し、少しずつではありますが、飯野町にある施設として地域の皆様に認識していただけてきたと思います。まだまだ浅い歴史ではありますが、日々の暮らしの中で利用者さんから“生き方”や“考え方”を教えられることも多いです。エピソードを一つ。

ある介護職員からこんな話がありました。特別養護老人ホームに入所している〇〇さんが、入居して数日たった夜に「実はここはいるのが皆に申し訳ない。息子からちゃんと話を聞いていなくてね。話を聞きたい。家に帰ろうかと思っている」と泣きながら話していた。その職員は「何とも答えられなかった。せつないですね。家に帰れないのに。息子さんに来ていただいて話をしてもらったら納得されるのですかね」と。入居してからいろいろな話をしてくれて、明るくふるまっている〇〇さん……。

“今の正直な気持ち”を聞いてどう考えますか？「しょうがないよ。どうしようもない」で聞き流しますか？「よくある話、時間が過ぎればあきらめるでしょう」と聞かなかったことにしますか？

〇〇さんのこの想いを受け止めて、



NPO やすらぎの郷いの

福島市飯野町字前川16

TEL 024-563-4804

ホームページ <http://yasuraginosatoiino.jp/>

〇〇さんの気持ちを受け止めて寄り添い考える。日々の暮らしの中で自分が介護職として〇〇さんにできることを考える。自分に置き換えて自分だったらどうしてほしいのかを考える。そしてチームとして出来ることを提案して実行する。それが目指す“介護”・・・
(〇〇さんの後日談)

ご家族と相談し、お盆時期とお正月時期には外出帰宅することになりました。ご家族と一緒に昼食を食べる機会を増やしました。家で新聞を読んでいたので、施設でも新聞を購読することになりました。職員の顔と名前を憶えていくにしたがい、落ち着いた様子で不安がほぼ無くなりました。そして、〇〇さんは何よりも今日も元気です。

<特別養護老人ホーム 飯野ふるさと村
統括部長 佐々木 伸也>

一言

“かけがえのない何気ない日々”

私事の体験ながら、この夏、医大病棟で約一ヶ月の入院生活を送りました。避暑地さながらの病院環境から盛夏の飯野に戻った時、何よりも実感したことは、冒頭の想いでした。全方位で重なりあう濃い緑の丘陵風景と点在する家並、そこで営まれている人々の暮らしと日々の交流……すべてが他に替えがたいもの、という感覚でした。

当NPO・事業開設6年目の秋、介護・生活支援どれをとっても求める人々のかけがえのない日常に参与している……そんな自覚をあらためて共有しあいながら、これからも元気な街の一翼を担っていききたいものです。(S)